

## 26日 土曜

### 使徒

27:1 さて、私たちが船でイタリアへ行くことが決まったとき、パウロとほかの数人の囚人は、親衛隊のユリウスという百人隊長に引き渡された。

27:2 私たちは、アジアの沿岸の各地に寄港して行く、アドラミティオの船に乗り込んで出発した。テサロニケのマケドニア人アスタルコも同行した。

27:3 翌日、私たちはシドンに入港した。ユリウスはパウロを親切に扱い、友人たちのところへ行って、もてなしを受けることを許した。

27:4 私たちはそこから船出し、向かい風だったので、キプロスの島陰を航行した。

27:5 そしてキリキアとパンフィリアの沖を航行して、リキアのミラに入港した。

27:6 ここで、百人隊長はイタリアへ行くアレクサンドリアの船を見つけて、それに私たちを乗り込ませた。

27:7 何日もの間、船の進みは遅く、やっとのことでクニドの沖まで来たが、風のせいでそれ以上は進めず、サルモネ沖のクレタの島陰を航行した。

27:8 そしてその岸に沿って進みながら、やっとのことで、ラサヤの町に近い「良い港」と呼ばれる場所に着いた。

27:9 かなりの時が経過し、断食の日もすでに過ぎていたため、もはや航海は危険であった。そこでパウロは人々に警告して、

27:10 「皆さん。私の見るところでは、この航海は積荷や船体だけでなく、私たちのいのちにも危害と大きな損失をもたらすでしょう」と言った。

27:11 しかし百人隊長は、パウロの言うこと



よりも、船長や船主のほうを信用した。

27:12 また、この港は冬を過ごすのに適していなかったので、多数の者たちの意見により、ここから船出し、できれば、南西と北西に面しているクレタの港フェニクスに行き、そこで冬を過ごそうということになった。

パウロの願いと祈りの通り、彼は囚人としてではありますがローマへ行けることになりました。人間の基準で考えれば、囚人ですから「伝道などできない。法廷では証などできない。まともに聞いてはもらえない。」と考えそうですが、パウロは違いました。

伝道というのは語る人に力が必要なのではなく、神の力が必要で、その力は状況に限定されないからです。迫害さえもできるほどの有力者であったパウロ自身が、神の力によって回心したように、ローマの人々も神によって変わると確信することができるのです。

航行は困難で前途の多難さを思わせるものでしたが、パウロの思いはローマに向いていたでしょう。イエス様の思いがエルサレムに向いていたように、異邦人の伝道者であるパウロの思いは世界の中心に向いており、そこに彼の希望があったのです。希望があるときにはどんな困難にも負けない力があります。

パウロがローマを神様からの希望としたように、自分にとっての希望を持ちましょう。あなたにとってのローマは何でしょうか。困難に負けない希望を神様からいただきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

